

# 民衆神学における復活事件

加藤 潔

## 1. マルコの「復活物語」沈黙の意味を問う

マルコ福音書が書かれた紀元70年頃、それ以前に各地の教会に配布されていたパウロ書簡に見られるように、イエスの復活はすでにキリスト教教理の重要な一部分であった<sup>(1)</sup>。イエスの生涯を記録するという形式をとる福音書の中でマタイ、ルカ、ヨハネの各福音書はそれぞれの文書の末尾においてイエスの復活を重要事項として記録した。しかし、マルコ福音書はイエスの復活を記録しない。たしかに、世界各地で現在使用されているマルコ福音書は16章9節以下に復活を記録するが、その記録は誰が見ても他の福音書記事の不手際な寄せ集めに過ぎないし、また、その部分は信頼しうるマルコの写本に欠落している。したがって、本来のマルコ福音書にはイエス復活の記録は存在しないと判断するのが当然である。記録されていたがその部分は紛失したのだという意見もあるが、それは16章9節以下を書き加えた後世の写本作成者と同様の悪あがきでしかない<sup>(2)</sup>。

マルコ福音書が書かれる以前に、すでにイエスの復活はキリスト教教理に不可欠な一部分を成しており、またマルコ以後に書かれた他の福音書はいずれもイエスの生涯の必然的帰結としての復活を記録しているように、周囲の圧倒的多数の復活肯定論の中であって、なぜ、マルコはイエスの生涯については熱心に記録しながらも復活については敢えて沈黙しているのか。

仮に、マルコはいかなる意味においても復活を否定し、イエスの復活については一切関心を示さないという答が出されるなら、そのような答は単純、明快であるし、死人が生き返って再び地上をうろつくという形での復活を信じられない現代のキリスト者にとっては、「喉に刺さった骨」のような「面倒だが無視できない疑問」を一掃するのに役立つかもしれない。しかし、マルコの事情はそのような簡単なものではない。マルコ14章28節は十字架処刑直前の場面で、「わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」というイエスの言葉を重要事項として記録しているし、マルコ福音書末尾の16章7節には「あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる」という弟子への伝言を記録している。つまり、マルコにとっても、イエスの出来事は彼の十字架処刑死によっては終了せず、「ガリラヤでのその後」が重要な事柄として予測されている。

したがって、正確には次のように言うべきだろう。マルコは、パウロたちによって当時のキリスト教界に流布されていた「復活物語」については敢えて沈黙した。

では、なぜ「復活物語」について沈黙したのか。「復活物語」の意図するところに賛同できなかったからである。

なぜ賛同できなかったのか。本稿はその理由を解明しようとするものである。

## 2. 新約聖書の復活理解

### 2.1 パウロの復活理解

新約聖書に収録された各文書の成立年代の順を追うならば、文書に表れた復活伝承の最古のものはパウロの筆による次の2つのテキストである<sup>(3)</sup>。

テキスト1：第1コリント15章3～8節

最も大切なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりにわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに3日目に復活したこと、ケファに現れ、その後12人に現れたことです。次いで、500人以上もの兄弟たちに同時に現れました。……次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。

テキスト2：第1テサロニケ4章13～17節

(略)

テキスト1については2つの点で検討が必要である。

第1は、記述内容の歴史性、すなわちパウロは歴史的事実としてこのような復活を主張しているのか、という点である。

迷語靈感説に立つ者は言うまでもないが、キリスト者の多数はこの歴史性を否定しない。もちろん「歴史性」という言葉の意味について厳密な議論が必要なのだが、何らかの形で、事実、イエスは彼らの前に姿を現したし、その事実を疑問視するならばキリスト教は崩壊すると考えている者が多数である<sup>(4)</sup>。しかし、確実に死んだ者が3日目に生き返って地上をうろつくなどということはあまりにも荒唐無稽の話なので、むしろ「キリスト教にとってアンタッチャブルな前提」として、「大切に」、その歴史性については「あまり触れずに」、「冷凍保存」しておくという態度が一般的である。

では、パウロ自身はこの歴史性をどこまで主張しているのだろうか。

このテキストに続く15章12節以下で、パウロは、復活を否定する人たちがいることを述べながら、復活否定論が誤りであることを力説し、14節では「キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です」と語り、続いてイエスの復活と信仰者の復活について、その順序と次第をこと細かに語る。たしかにその熱弁は、復活がキリスト教の生命線であると思わせる効果を発揮している。

しかし、15章全体は3節の「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです」に依拠している。同様の趣旨は15章の各所に見られる。「私自身も受

けたもの」とは、その内容が当時のキリスト教のケリュグマ、すなわち信仰告白、ないし宣教内容の箇条であったという意味である。ケリュグマであるからその歴史性は保障されるという見解もあるが、伝承の源を古くさかのぼれるとは言えても、その歴史性の保障をここに見出すのは困難である。ケファ（ペテロ）を弟子の筆頭者とする考え、12弟子がキリスト教の中心であるとする使徒職權威の考えは今日その歴史性が認められないからである。

テキストの歴史性に関わって、その内容の矛盾点も検討する必要がある。

復活の目撃者の順序は、まず5、6節において、ケファ、12弟子、500人となっている。これは、証言は数が多いほど信頼に足りるという理由から、ケファ1人から12人、そして500人に増加する形をとる。さらに、その500人の内ほとんどの者は今も生き残っているという報告によって目撃証言の信憑性が補完される。しかし、その次の部分に不可解な重複と混乱が露呈する。7節は、「ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ」と記すが、内容的には明らかに5、6節の重複であり、目撃の順序としては混乱が見られる。おそらく、本来のケリュグマは5節までであり、その内容は、「わたしたちの罪のために死んだ」、「葬られた」、「3日目に復活した」の3箇条であったのだろう。

その論述表現と論理において厳密さを誇るパウロがなぜこのような重複と混乱を露呈したのか、この点が第2の検討課題となる。

目撃者リストの重複と混乱は、パウロの単なる不注意でもなく、文学的装飾でもない。これは意図的な重複である。

なぜ、7節以下が書かれたのか。それは8節を導き出すためである。すなわち、パウロ自身も復活の目撃者であること、その目撃はケファや12弟子の目撃と同等の内容と重要性を持つことを主張するために、パウロは5、6節を繰り返す形で7節を書き、続いて8節に自らを登場させた。たしかに、5節までのケリュグマ本体部分の叙述は、出来事を配列するにあたって“και”をもってつなぎ、6節、7節は“επειτα”をもってつないではいるが、おそらく、6節冒頭の“επειτα”から8節の記述を意図し、ケリュグマの權威を失わせない形で一気に自分自身を復活の目撃者に位置づける手法をとったと思われる<sup>5)</sup>。

パウロの意図は明白である。彼は復活に関するケリュグマを用いたが、それは自らを復活の目撃者の地位に置くためであった。そのためにケリュグマの權威を用い、ケリュグマ自体の改編は行なわなかったが、あたかもケリュグマの必然的継続であるかのような形の中に自分をすべりこませた。それは、復活の目撃者のみがキリスト直属の「使徒」の地位を得ている状況の中で、自らを「使徒」の一人に位置づけるためであった。ケリュグマ自体が復活の歴史性を含まないだけでなく、パウロはこのような自らへの權威づけを目的とする操作によって、結果として復活の歴史性を否定してしまった。

このように、ケリュグマは、その本来の意図としては復活を歴史的事実として語ろうとしているとしても、パウロは自らの使徒職肯定のために、結果としてその歴史性を否定するに至るのだが、ここに生じる矛盾はキリスト者の復活の様態の説明においてさらに露呈する。

まず、パウロは復活の歴史性を端的に表現した「空の墓」の伝承を無視する。「イエスの墓

は空であった」などというあまりにもリアルな復活の歴史性主張の文言は、ケリュグマの裾に自らをすべりこませようと図るパウロにとってまことに不利な代物である。

だが、パウロは復活の抽象化を嫌う。彼の贖罪論は復活のリアリティによって完結するからである。そのために彼はキリスト者の復活について熱心に、詳細に語りはじめるのだが、とても分かりにくい。

「肉 (σὰρξ) と血 (αἷμα) は神の国を受け継ぐことはできず、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐことはできません」と断言する。これは肉 (σὰρξ) の復活を否定する言葉である。それでは霊 (πνεῦμα) の復活かと言うとそうでもない。彼はここで地上の人間を「命の体 (σῶμα ψυχικόν)」と表現し、復活した者を「霊の体 (σῶμα πνευματικόν)」と表現する。これは二元論的には成立しない表現であるが、パウロはここで「体 (σῶμα)」を地上の人間が持つ「肉体」の意味ではなく、彼独特の、いわば「総体的人間」とでも言う意味で用いている。しかし、その意味も時として不明確になり、「肉の体 (σῶμα)」が「霊の体 (σῶμα πνευματικόν)」に変化するとも言う。彼は地上の人間の姿、性質、年令、その他さまざまな属性が復活の後も継続するという趣旨の復活を否定しているのだが、さりとてどのような復活の姿なのかは明確ではない。

つまり、紀元1世紀の最後か、あるいは2世紀にかかる時代に書かれたヨハネ福音書の復活物語が復活のイエスの様態についてまったく混乱した記述をしているように、パウロにおいてすでにイエスの復活体についても、キリスト者の復活体についても、論理的に表現しうる概念はなかったのである。

## 2.2 マルコ、マタイ、ルカ、ヨハネ福音書の復活物語

ここで、4つの福音書の復活物語を比較しておく。墓の場面は表にして表し、その後の顕現については要点のみを挙げておく。

項目	マルコ	マタイ	ルカ	ヨハネ
墓に行っ た人	マグダラのマリヤ ヤコブの母マリヤ サロメ	マグダラのマリヤ とほかのマリヤ	マグダラのマリヤ ヨハンナ ヤコブの母マリヤ ほかの女たち	マグダラのマリヤ ペテロ ヨハネ
墓の入口 に現れた 人	白い長い衣を着た 若者	稲妻のように輝き 雪のように真っ白 な衣を着た主の使	輝いた衣を着た2 人の男	白い衣を着た2人 の天使 イエス
女たちの 行動	恐れて墓から逃げ 去り、人には何も 言わなかった	恐れながらも大喜 びで弟子たちに知 らせに走っていく が、途中でイエス に会い足を抱いて 拝す	墓から帰って弟子 や他の人たちに知 らせた	弟子たちに報告し た

以下、復活後の顕現を中心に各福音書の記述の要点と特徴に注目したい。

(1) マルコ

マルコには復活後の顕現物語はない。マルコが強調するのは16章1～8節の「空の墓」である。ところが、その「空の墓」についても、「ガリラヤへ行けばイエスに会える」との告知も、弟子たちには伝えられない。女たちは恐ろしくなり、あたふたと逃げ出して姿をくらました。マルコの執筆当時のキリスト教の常識からすれば、女たちの逃走でイエスの物語が終わるはずはないのだが、マルコはこの常識を破る中に自らの主張を込めた。その主張が何であるかは、後に述べる。

(2) マタイ

マタイは2つの物語を記録する。1つは、ユダヤ教当局がイエスの復活を否定するために、弟子たちがイエスの死体を盗み出し、それを隠して復活を宣伝しているといううわさを恣意的に流布したという物語である。これはマタイ独自の物語であって、当時このよううわさがどの程度流布されていたのかは判明しないが、マタイはこのうわさをありもしないでっちあげとして扱うことによって、復活の歴史性を主張しようとする。

マタイの第2の物語は、昇天に先立つ世界宣教命令の物語である。場所はガリラヤの山の上。復活の目撃者はユダを除く11弟子。しかし、この物語はユダヤ教に代わる正統的選民集団をイエスが設立したというマタイ神学の晴れやかな終幕劇であって、復活の歴史性の立証についてマタイは興味を示さない。したがって、福音書における復活の歴史性の論議からマタイを除外してもよい。マタイにとっては12弟子に与えられる「使徒」職の権威が重要なのである。

(3) ルカ

ルカは2つの物語を記録するが、いずれも顕現の場所に意味がある。

ルカは、イエスの福音がガリラヤから始まり、ユダヤの中心地エルサレムに到達し、そこから世界の中心地ローマに至るといった地理的な進展を描くことによってルカ特有の救済史観を語ろうとしているのだが、復活のイエスは着実にこの地理的図式の中で姿を現す<sup>(6)</sup>。

ルカのイエス物語においてエルサレムはイエスの生涯の最後、十字架処刑死の場所であり、イエスの出来事の終結の場所である。顕現の第1の場所は「エルサレムからエマオに下る途上」とされる。第2に、イエスは「まだエルサレムにこだわっている」11弟子に会いにエルサレムへ行って姿を現すが、「福音はエルサレムから始まって世界のすべての国々に宣教される」と語った後に昇天する。そして、ルカがその福音書の続編として書いた使徒言行録において、イエスの物語は使徒たちの手によってエルサレムからローマへと伝えられる。

このように、復活物語においてもルカは自分の神学をたくみに顕現場所の中に盛り込むが、復活の歴史性についても興味深い語り方をする。

エマオ途上でイエスは2人の弟子と宿屋でパンを食べるが、その場面は教会ですでに行なわれていた聖餐式を連想させるものであり、その「パン裂き」の行為によって弟子はイエスの復活を確認している。そして、その確認がなされるとイエスの姿は消える。このように描いて、ルカは復活顕現を教会の礼典の中に位置づけようとしている<sup>(7)</sup>。

しかし、第2の物語の中では、復活とは「亡霊を見ること」ではないのかという疑問が提示される。その疑問に対して復活のイエスは手足を見せ、焼き魚を弟子の前で食べるという行為によって答えている。第1の物語では、復活を礼典と結びつけて復活に対して実存的な解釈を施し、第2の物語では、手足、焼き魚などを用いて復活の歴史性証明の努力を試みている。これは、復活理解に関する過渡期の物語と言うべきだろう。

#### (4) ヨハネ

ヨハネの物語はエルサレムとガリラヤの2つを場所とする物語群に分けられるが、イエスはエルサレムでは隠れていた弟子たちに鍵をかけた戸を通過して2度現れる。ここでイエスは、手足を見せるという復活の歴史性主張とも思える行為をするが、復活は「聖霊を受ける」とことと「信じること」によって現実になると語る。ヨハネにとって復活の歴史性とは、「信仰の現実」として主張されている。

ヨハネの復活物語のガリラヤ版は、ヨハネの時代にすでに広く伝えられていた生前のイエスの魚捕り物語、魚料理物語、そして魚捕りにまつわるペテロの召命物語などいくつかの物語を組み合わせて、それを復活版に書き換え、筆頭弟子としてのペテロの権威を根拠づける物語に仕立てている。この物語は21章にあって、すでに20章末尾でヨハネ福音書は結末の言葉を記していることから考えて、何らかの事情による加筆であるかもしれない。いずれにしても、ヨハネにおいて復活は完全に実存的出来事として語られる。

マルコ以外の3つの福音書の復活物語は、2つの方向に従った変化の跡を見せている。第1は、復活の目撃者をイエス直属の「使徒」とし、その使徒職の権威の下に教会を設立しようとする方向であり、第2は、復活をイエスとの実存的出会いの出来事とし、その出会いを礼典の中に位置づけ、その出会いを確認するためには「信仰」、「聖霊」などが不可欠であるとする神学の形成への方向である。そして、これらの変化の過程の中に、復活の歴史性に対するさまざまな疑問との対話、格闘、混乱、とまどいが見られるのである。

### 2.3 復活をめぐる疑問と福音書の答

ここで、その変化の跡を各福音書の記事からたどっておきたい。

各福音書はそれぞれの著作目的と独自の編集方法、及び表現形式を持つので、各福音書の復活の記録の意味については、各福音書ごとの著作目的に照らしながらそれぞれの復活物語の特有の主張点を解明する必要がある。しかしながら、いずれの福音書においても、一方において積極的主張点を持つと同時に、他方、復活に関する多様な疑問に答えようとする意図が含まれていると考えざるを得ない。

この多様な疑問の存在は、すでにパウロ書簡にも見られる。それは、復活否定論に始まり、復活の様態、順序、復活の恩恵にあずかる資格や範囲など、多岐にわたる。紀元1世紀のキリスト教は、復活に関しては多様な、そして深刻な議論が錯綜する場であり、福音書もその錯綜する議論と無関係ではないと言える。この疑問を無視し、放置したまま福音書を読むならば、復活の真相は解明されない。

そこで、福音書の復活物語に現れる、あるいはその背後にある疑問とその答の実際を検討しておきたい。

福音書における復活伝承の基本は、マルコが記録している「空の墓」の伝承である。この「空の墓」伝承に対して少なくとも6つの疑問が生まれる。

(1) 弟子が死体を盗み出したのではないか？

マタイの復活物語はこの疑問を中心に展開される。

27章62～66節で、ピラトは弟子が死体を盗み出して復活を宣伝しないように兵士に墓の見張りを命じる。

28章2～4節で、天使の出現に際しての地震と、稲妻のように輝く天使の姿によって、兵士は卒倒してしまう。

28章11～15節で、祭司長は弟子による死体盗み出しのうわさを広めるように兵士に命じ、「この話は、今日に至るまでユダヤ人の間で広まっている」と記す。この事件についてマタイは熱心に論じるが、他の福音書はなぜか完全に無視している。

(2) 目撃したと言っても、それは亡霊ではないのか？

これは単純な疑問のように思えるが、長く続いた根本的な疑問である。

この疑問については、ルカとヨハネが弟子の抱いた疑問という形で報告している。

ルカ24章37～40節では、弟子自らが復活のイエスを亡霊であると思って恐れたと報告し、それに対してイエスは手足を見せて確かめるように促す。

ヨハネ20章19～29節は2つの場面に分かれるが、前半でイエスは現れるとすぐに手足を見せて復活の事実を示す。後半は、前半の場面に居合わせなかったトマスの疑問に対して、再び現れたイエスが手と脇腹の傷を触って確かめろと言う。しかし、トマスは触らない。そして、「見ないのに信じる人は、幸いである」というイエスの言葉が続く。

このほか、ルカとヨハネにはイエスが魚を食べる場面を記録しているが、これも亡霊説に対する反論の意味を持つと考えてよい。

(3) それでは生前とまったく同じ姿なのか？

この疑問に対しては直接的な答はない。

ヨハネ20章19～29節ではイエスは2度にわたって鍵のかかった部屋に入る。

ルカ24章13～35節では、エマオに向かって歩く2人の弟子にとって復活のイエスの姿は生前のものと違う。しかし、イエスが語り始めるとイエスと分かる。また、その後突如として姿が消える。

これらいずれの場面においても、イエスの登場の仕方は準備も必然もなく、突然である。復活のイエスは生前と同じでありつつ、しかし異なっているとしか説明がつかないのだろう。

(4) やはり、事実ではないのではないか？

当然、このような再質問が出されるのだが、福音書は次のように答える。

聖霊を受けること、信じることが必要だ。これはもっぱらヨハネの主張である。ヨハネはその著作時すでにイエスの復活の歴史性立証を断念し、復活は信仰の次元の出来事であると断定

している。

(5) 誰でもイエスと会えるのか？

復活のイエスとの出会いが強調されるにつれて、誰が、いつ、どのようにして復活者と会えるのかという疑問が生じる。この疑問は答えにくい。エルサレム教会とパウロは復活の目撃を特別の者、すなわち使徒の特権として主張していたのだが、復活のイエスとの出会いが教理と倫理の中心に位置を占めるに及んで、復活者との出会いを特定の者に限定できなくなっていった。

ルカはパンを割く儀式、すなわち聖餐式の中で復活者との出会いが現実となると答えた。

ヨハネは、トマスの物語を通して、信仰によって出会うと答えた。イエスと共に魚を食べる場面も聖餐式を連想させるものであるのかもしれない。

(6) いつまでも会えるのか？

この疑問に対しては、明確な答はない。ルカの昇天、マタイの「いつまでも共にいる」という約束の言葉などは答の一部と言えるが、すでに聖餐式において、信仰の次元において会えると答えているので、昇天物語が特にこの疑問への答だとする必要はないのかもしれない。

各福音書の復活物語はそれぞれに特有の主張点を持っているとはいえ、その相当部分は、疑問に対する回答を示すためになされた議論の経過を示す記録である。そして、その議論は前節で述べた2つの方向に収斂されていくのである。

### 3. マルコ福音書の復活物語

復活とは何かをめぐるこれらの疑問に対して、うろたえも混乱も示さない福音書はマルコである。マルコは沈黙をもって答える。マルコの沈黙を示すテキストは次のとおりである。

テキスト：マルコ福音書 16章 6～8節

若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。ご覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペテロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

マルコにおいて、復活したイエスは姿を現さない。それはなぜか。復活の知らせは女たちに伝えられ、弟子たちにも伝えろと命じられるが、女たちは弟子たちに伝えず、姿をくらます。他の福音書を読んでいる聖書読者は、「でも、あとで知らせたし、イエスは直接弟子たちに会っている」と考えてこの沈黙を無視するが、マルコは沈黙をもって自らの福音書を閉じている。この意味は何か。以下、マルコの主張を要約する。



### 3.1 使徒職の権威への反論

マルコ福音書は紀元 70 年頃に書かれたが、その時代には広範に、多様な復活伝承が存在した。

3つの福音書の復活後の顕現を内容によって分類すると、次の7つの物語になる。

- (1) イエスは室内で弟子に現れ、復活の証明として手、足、脇腹の傷を見せる。  
ルカ 24 章 36～40 節。ヨハネ 20 章 19～29 節。ヨハネは信じなかったトマスの物語を加える。
- (2) イエスはガリラヤ湖畔で魚を食べる。  
ルカ 24 章 41～43 節。ヨハネ 21 章 1～14 節。ヨハネではイエスは魚捕りを行なう。
- (3) イエスは弟子たちに宣教を命じる。  
マタイ 28 章 16～20 節。ルカ 24 章 44～48 節。
- (4) 弟子がイエスの死体を盗んだといううわさが流れる。  
マタイ 28 章 11～15 節。
- (5) イエスは 2 人の弟子に現れ、パンを食べる。  
ルカ 24 章 13～35 節。
- (6) イエスはペテロを筆頭の弟子として認める。  
ヨハネ 21 章 15～23 節。
- (7) イエスは天に昇る。  
ルカ 24 章 50～54 節。

マタイなどはマルコに対する反論の意図を持っているので、単純に扱うことには注意を要するが、墓からの帰途の顕現を除けば、かなりマタイはオリジナルな伝承を扱っているし、ルカ、ヨハネについても独自の伝承を挙げることができる。そこでこれらを整理してマルコ時代に流布されていた復活伝承一覧を作成することは可能なのだが、すでに指摘したように、福音書はこれらを復活に関する議論の中で採用しているので、マルコが意識した復活伝承の中核が何であったのかは福音書の分析からは必ずしも判然としない。

したがって、マルコが意識した復活伝承が多岐にわたるものであったとしても、問題にすべきなのはエルサレム教会のケリュグマである。それは次の 5 項目から成っている。

- (1) キリストは人間の罪のために死んだ。
- (2) 葬られた。
- (3) 3 日目に復活した。
- (4) ケファ（ペテロ）に現れた。
- (5) 12 人の弟子に現れた。

この内、マルコはペテロ、12 弟子への顕現について沈黙している。すでに教会のケリュグマとして流布され、誰もが知り、重要と認めている項目の中から、マルコは意識的にペテロと 12 弟子への顕現を自分の福音書から削除したのである。

なぜマルコはペテロと弟子への顕現を削除したのか。

### 3.2 イエスの実像に反するキリスト論の拒否

ふたたびパウロの復活論に目を向ける。

パウロはエルサレム教会のケリュグマを利用し、使徒の權威の根拠を復活の目撃に置き、自らを復活の目撃者とすることによって使徒の一員であると主張した。パウロのこのような主張に対する反論は、パウロ派、アポロ派、ペテロ派などの党派争いの中で執拗に繰り返されたことをパウロ自身が報告しているが、マルコは2つの理由をもってパウロ、及びエルサレム教会に反論する。

第1は、復活目撃を根拠とする使徒職の權威に対するものである。

エルサレム教会はイエスの弟ヤコブをイエスの後継者として位置づけ、その下にペテロを筆頭とする12弟子を使徒として配置して、ユダヤ教に代わる新しい選民と自称してエルサレムを中心とするユダヤ民族主義に立つ宗教団体の確立を企てた。この企ては、いまさら理由を挙げるまでもなくイエスの意思と行為に反するものであった。それゆえ、マルコは使徒職の權威の根拠となるペテロたちの復活目撃伝承を削除した。

第2の理由は、エルサレム教会の教理である。

これは、マタイ福音書とパウロ書簡に示されるものであるが、ここではパウロのキリスト論を取り上げる。

パウロのキリスト論ではイエスの振舞いと言葉はすっかり抜け落ちて、神の子キリストの十字架の死だけが重要とされる。そして十字架の死は贖罪の死とされる。これは、罪を犯せばかならず罰せられなければならない、したがって本人以外の身代わりが罰を受けなければならないとする、ユダヤ教をはじめ、ギリシャ・ローマの祭儀宗教の法的・祭儀的 (Juristisch-kultisch) 論理である。このキリスト論に登場する神は、祭儀宗教の論理に従って、罪を犯す人間にかならず罰を与える神となり、罪を犯した者の身代わりに血の代償を求める神であり、その身代わりとして自分の息子を殺す神となる。イエスはこのような血に飢えた神の贖罪論を一度も語ったことがないばかりか、彼はそのような考えを否定する<sup>(8)</sup>。

イエスは人間を罪人と規定したことはない。人間を罪人と規定するのは、差別の論理であり、差別の社会的構造を宗教的・理念的に補完するためのものである。イエスはこの論理を拒否した。それゆえ、贖罪の論理はイエスの死に相応しくない。マルコはエルサレム教会によるイエスの死と復活の独占を拒否する<sup>(9)</sup>。それゆえ、マルコは使徒と会うイエスを描くことを拒み、「ガリラヤで会おう」という呼びかけだけを記録する。では、なぜガリラヤなのか。

このことについては、韓国の民衆神学者、安炳茂 (アン・ピョンム) の言葉を引用して説明に代えたい<sup>(10)</sup>。

マルコ伝承は何故ガリラヤを再び会う場所であると信じていたのか。答は極めて簡単です。ガリラヤはイエスの公生涯活動の現場ですし、民衆とともに生きた場所です。大勢の民衆が彼にありとあらゆる期待をかけ、彼とともに新しい天と新しい地が出現することを夢見た場所です。それなのに、イエスがエルサレムで処刑され

たことによって断絶されたのです。ですから、ガリラヤは民衆の失望の現場です。

まったく絶望していたガリラヤの民衆には、一大転換の事件が起こったわけですが、それまた、決して主客の図式では説明できない事件であったに違いありません。つまり、失望していた弟子たちが、復活したイエスに会ってから新しい人変わったとは考えられないし、むしろ死んだイエスの復活事件と、彼らの再起とを分離せず、同時に起こった事件であると説明するほうがより現実感があります。こういう事件を伝えようとした場合、顕示についての童話のような物語よりは、むしろそれに対して沈黙し、読者の想像にまかせた方がもっとも適切な方法であった、と思われれます。言ってみれば、ガリラヤの民衆に一大転換の事件が起こったのです。ガリラヤでの復活事件が起こりました。

マルコにとって復活とは、ガリラヤで起きた「民衆」の「事件」なのである。それゆえ、マルコはガリラヤに行けばイエスに会えると語り、エルサレムに留まってエルサレム教会の指導者となる者と復活とを切り離すのである。

紀元1世紀に、ペテロと12弟子の使徒職の権威を主張する復活に関するケリュグマが存在した。それはエルサレム教会から生まれ、パウロはそれを自らの権威のために用いた。これとは別に、ガリラヤの民衆による事件としてのイエス復活伝承が存在し、マルコはこれに基づいてエルサレム教会の主張に反論する福音書を書き、復活については、ケリュグマに基づく復活物語に異議を唱えた。今日、復活を論じるとすれば、少なくともこの論争の基本構造は踏まえておかなければならない。

### 3.3 復活の現場

新約聖書の中でマルコ福音書だけが復活を礼典論や使徒職権威論に結びつけない。マルコは復活を「空の墓」の「事件」としてとらえる。

マルコは一貫してイエスを「事件」としてとらえ、描いている。イエスの生涯活動の冒頭は、政治犯として捕らえられたバプテスマのヨハネの投獄「事件」に呼応するものとして始まる。ヨハネの「事件」は抑圧者の支配下にある「民衆」の「事件」である。

イエスはその「事件」の「現場」であるガリラヤに行き、活動を開始する。マルコにおけるイエスはすべて「事件」との関係において描かれ、イエスは周囲の民衆と共に民衆決起の「事件」となる。イエス自身が「事件」なのである。

「イエスの十字架の死は、一個人の死を示すものではなく、支配者に抑圧され、死んだ民衆の死を示す。」(安炳茂)

殺された者の墓は空であった。殺された者は墓の中に留まらず、民衆の事件の現場であるガリラヤへ行く。この事件の現場でイエスは民衆となって生きる。これがマルコの復活論である。

イエスの復活は、殺された民衆の復活となる。マルコはその福音書末尾の沈黙によって、この復活事件は時を超えて起こると主張する<sup>(11)</sup>。

1985年9月、軍事独裁政権に反対する韓国民主化闘争が重大局面を迎える中、何日も警察

に包囲された大学の構内で、大学生、宋光永（ソン・クァンヨン）が焼身自殺を図った。

「今は身を投げ出して国を救う時だ。我々は暴力で抵抗する力もないし、人を殺す立場にもない。ただ、唯一の方法は、自分自身を神に捧げ、祈るしか外ない」。この言葉を終えた彼は焼身自殺を図る。この事件を聞いた数千の学生と民主化運動家たちが病院に駆けつけるが、警察によって阻まれる。病院の外では数千の学生たちが松明を持ち、「おお自由よ」の歌を歌いながら警察と対峙している。ただ彼の母と、偶然早く行った文益煥（ムン・イクファン）牧師だけが病院の中に入り、彼の遺体と対面する。

文益煥牧師は詩人でもあるので、母が遺体を前にして語る言葉と自分の言葉とを一篇の詩の形にして残した<sup>(12)</sup>。

文/あなたのお母さんは泣き止みました。  
もう身をふるわせてもいません。  
静かに小さい孫を抱いて座っています。  
一人で何か呟いています。

母/目をつぶれば、  
光永（クァンヨン）があちこち走り回るのが瞼に焼きついて離れない。  
あの子どもたち、全部おらの子でないか。  
炎がぼうぼうと燃え上がっているの見える。  
あの訴える声がみんな光永でないか。  
あのため息も、淋しさも、つらさも、前の山、後の山のこだまも、  
春霞も、そのどれもが、光永でないか。

おお自由よ、  
おお自由よ、  
あの歌は何だ。  
あれも光永だ。  
ひょっとしたら、ひょっとしたら、  
そうだ、光永は同胞（はらから）だ。

文/恨（ハン）に積もった休戦線だ。  
休戦ラインの上に落ちる血の涙だ。  
鉄のバリケードに引っかかって、  
ふらふら揺れている引き裂けた衣服の切れっぱし。  
風に吹きさらされて母のチマの裾にすがりついて泣く旗。  
それが民主主義のはためく旗にちがいない。

母/民主主義って何だか、おらにはわからない。

だが光永の心だけはわかる。

おらの中から生まれ落ちたおらの餓鬼の心はわかる。

文/それでいい。

母/光永の心が民主主義だ。

おらのチマ裾にぶらさがって、はためく、光永の心、

それが民主主義であれば民主主義万歳だ。

光永よ、おらの光永よ、

今こんな世の中で殺されたおらの子を何でこわがるんだ。

今は何も喋れないのにさ。

自分の体を燃やして暴れることもできないのにさ。

何でみんな目をまわしておっかながるんだ。

何で弔問もできないように何度も塀をこさえて邪魔するんだ。

何で、文（ムン）牧師と桂（ケ）先生と李（イ）牧師を引っこ抜いていくんだ。

泥棒が自分の足音でびっくりするっていうが、

あれがまったくそうでないか。

兎が自分の屁でびっくらこいて逃げ出したみたいだ。

光永の不屈の心がおっかないんだ。

文/本当です。そうですね。

母/光永の体は冷たくなったけど、心は冷えるもんかね。とんでもないことだ。

母の心がこんなに燃えているのに、何で光永の心が冷えるもんかね。

もしその心が冷めるとしたら、

あんたたちが騒いでいる祖国も、民主主義も、みんな嘘だ。

自由も、真理も、正義もみんなうるさい戯言でしかない。

文/そうだ、そうだ、お母さん。

その心が冷めるとすれば、みんな戯言というのはそのとおりですよ。

もう、千回でも、万回でも、そのとおりですよ。

母/おらの子は小さい時から嘘は知らない。

これが石といえ、それが石だし、あれが木だと言え、木なんだ。

おらは兄さんみたいにはすまないよと言ったのに、

自分の体に火をつけて死んでしまったんだ。

文/そうですね、お母さん。

殺されることによって生きた彼の真実が、そんなにも怖いものなのです。

母/嘘こいてぶくぶく太ったあいつらに、

おらの子の鏡のように澄みきった心根が、

何でおっかなくなくてすむもんかね。

文/彼の真実の前では、

この世の偽りがみんな隠れていることができなくなったんでしょうね。

母/そんなであれば、どんなに嬉しいか。

おらの子は、大学の卒業証書は貰わなかったけど、

嫁さんも貰えないで、こんなにして埋められて臭くなっていくけど、

自分のうんこの匂いが臭いということくらいわかる世の中になれば、

光永は何百回でも自分の体に火を燃やしても、きっと残るんだ。

復活の歴史性を2千年前にさかのぼって新約聖書の中に追求することは意味がない。パウロは復活に関するケリユグマを提示するだけである。マタイはユダヤ主義主張にのみ走り、ルカ、ヨハネはその歴史性について混乱し、結局はいずれも実存的なイエスとの出会いという概念の中に復活の歴史性の議論を移行させている。

それでは、復活を追求することは無意味なのか。マルコは、復活を民衆の事件としてとらえている。

今日、復活を論じようとするならば、マルコの視点に従う以外に方法も道もない。その「道」は、今日の「民衆の復活事件」に関わる「行態（ヘンテ）」の中にある<sup>(13)</sup>。

#### 註

- (1) マルコ福音書の成立年代については、ユダヤ戦争によるエルサレム崩壊を連想させる13章の記事を事前予告とするか事後予言とするかを巡って議論されることが多い。安炳茂は、5千人、及び4千人の民衆にパンを与える2つの物語を取り上げて、その物語の背景にユダヤ戦争による難民を想定して、この福音書の成立年代を70年直後と見ている。この見解は、復活事件のとらえ方と深く結びつく。
- (2) 日本基督教団出版局「総説新約聖書」は新約聖書の解題として同教団の聖書解釈の基準を示す書物だが、その第2章「共観福音書」（橋本滋男著）の第3節「マルコ福音書」は、

16章9節以下は「本文批評の基本原則によれば」「マルコ本来の文ではない」としながらも、この部分の「脱落」説を主張する。著者はその理由を「空っぽの墓を見た女たちが恐れを抱き、天使の命令に反して沈黙したままであったというのは、救いの喜びを語るはずの福音書の結びとして適切とはいえない」、「パピルスのような紙葉に記した作品の場合、最後の一枚または数枚が損傷・逸失することは他にも例が多いので、マルコの場合も偶然起こったのかもしれない」と述べるが、これは根拠のない推測であって、このような議論が罷り通るとすればもはや学問的な研究は成り立たない。そもそも、この著者にとって「救いの喜び」とは何を意味するのか。まったく、話にならない。

- (3) 「韓国教会は聖書の基準をパウロに置き、パウロが書いたガラテヤ書、ローマ書を聖書の骨格とし、共観福音書さえもそういう見方でもって読むべきだ、としました。教理的に形成されたキリスト論を、福音書をとおして再確認するばかりで、それ以上に深く進もうとはしませんでした。」これは安炳茂の言葉であるが、日本の教会にも見事にあてはまる事実である。
- (4) 復活の歴史性を主張したいがその証明の根拠がないという場合に、ユダを除く11人の弟子は一度は逃げたが、その後は迫害を恐れず伝道する者になったという劇的な変化を取り上げて「だから、そこには論理を超えてはいるが『歴史的な何か』があった」と説明する人がある。ところが、例外を除けばイエスの弟子はほとんど逃げたままで姿をくらましている。イエスの弟子が12人だったという話も事実と反する。イエスの弟子と呼ばれる者がいるとすれば、それはガリラヤの民衆である。作り話を前提にした復活証明の議論は、ますます復活の「真実」を隠蔽してしまう。
- (5) パウロの復活目撃者リストは巧妙である。はじめに「ケファ、12人」と言い、次に「ヤコブ、すべての使徒」と言う。このヤコブが12弟子の中のヤコブであるはずがないから、これはイエスの弟のヤコブであり、その血統のゆえにエルサレム教会の頂点に祭り上げられた男である。パウロはヤコブを復活の目撃者に祭り上げることによってエルサレム教会の権威主義を巧みに利用し、自分自身を使徒の地位につかせる。
- (6) Hans Conzelmann: DIE MITTE DER ZEIT, Studien zur Theologie des Lukas, 1962. を参照。
- (7) イエスが sacrament としての聖餐式を制定した記録はマルコにはない。最後の晩餐も sacrament ではない。イエスが望み、実行したことがあるとすれば、それは「愛の食事」である。場所は農家の台所であったり、宴会場であったり、野原、湖畔であったりするが、宗教団体の正会員のみを特定した「宗教的救済の特典」、または「永遠の命の保障」としての儀式を行なったことはない。教会も、はじめは「愛の食事」を行なっていたのだが、次第にそれが儀式化し、儀式の要素だけが残って聖餐式となった。その特別の意味を付与した儀式への変化がルカに見られるのである。
- (8) 十字架処刑死を贖罪論として意味づけたのはパウロである。イエスは、民衆の抑圧死を死んだ。民衆はその死の中に自らの命を見た。

- (9) イエスは今日のキリスト教が規定するような意味で人間を「罪人」と規定したことは一度もない。「あなたの罪は許された」というイエスの言葉は、「差別の社会構造はあなたを『罪人』と規定するが、あなたはそのような罪人ではなく、自由な、尊厳にあふれた『神の子』である」と語ったのである。
- (10) 安炳茂「民衆神学を語る」378頁。
- (11) 韓国教会にとって最初の「事件」は、労働者の権利を主張して焼身自殺をとげた22歳の全泰壺（チョン・テイル）の「事件」であった。
- (12) 在日アジア人センター「民衆神学Ⅱ」81頁。文益煥（ムン・イクファン）牧師は韓国神学大学教授。旧約学、特に預言者研究を専門とし、詩人でもある。韓国民主化闘争で何度も投獄され、また南北統一についても投獄を覚悟で行動した民衆神学者の一人である。
- (13) 行態（ヘンテ）は日本語では「振る舞い」の意味だが、「終始一貫して身をもってする行い」という意味でハンゲルを用いた。